

第四十節の隠された歴史 — 第十六回

第二の災い——第三部

Jeff Pippenger

2026-06-18

ジョーンズの論理

黙示録十四章の第一の御使いは、それに続く二人の御使いから切り離すことができないというジョーンズの論理は、揺るぎなく堅固である。彼がそれら三人の御使いとラッパの御使いたちとの構造的連関を見いだしたことは、まったく反駁の余地がない。彼の強調点は疑いなく黙示録十四章の三人の御使いに置かれていたが、それらを「不可分のもの」として適用する論理は、その前に現れるすべての御使いに対しても同様に妥当である。

彼は黙示録十四章の三天使に焦点を当てていたため、自らの論理をその最終的な結論にまで徹底して推し進めることはしなかった。究極的には、彼が第五、第六、第七の禍いのラッパを黙示録十四章の三天使に結びつけるために用いたその論理は、ラッパの系列を七人のラッパの天使の第一の者にまでさかのぼらせることをも含んでいた。

そして私は、神の御前に立っている七人の御使いを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。……そして、その七つのラッパを持っている七人の御使いは、吹き鳴らそうとして備えをした。黙示録 8:2, 6.

天使たちの一連の系列は「七人の」ラッパの天使たちから始まり、黙示録における天使たちの系譜は、第一のラッパから獣の刻印に関する第三の天使の警告に至るまで続いている。最初の四つのラッパと最後の三つの禍いのラッパとの区別を認める点で、ジョーンズは正しい。というのは、その「四と三」という預言的構造は、諸教会と封印の中にも見いだされるからである。黙示録において三人の証人の上に確立されていることは、見ることを選ぶ者たちに対して、七が象徴としてであるように、四もまた象徴として、三もまた象徴として含まれていることを示している。

神聖な結びつき

近年、私たちが明らかにしてきたのは、黙示録十四章の第一および第二天使が、第一および第二の災いとしてのイスラムに関する時の預言によって力を与えられており、第三天使への力の付与は、9/11における第三の災いの成就によって達成される、ということである。ジョーンズの適用が示しているのは、（たとえ彼が私の論点を述べてはいなくても、）黙示録八章の第一のラッパの天使から黙示録十一章の第三の災いのラッパに至るまでのすべての天使が、黙示録十四章の三天使と不可分に結びついているということである。それらは同一の預言的線の中にある象徴である。各天使が表しているさまざまな役割を理解するためには、それらをそのようなものとして認識しなければならない。したがって、七つの教会、封印、そしてラッパが七を表し、また七という全体の象徴性の中における四と三の象徴をも表しているのと同じように、七人のラッパの天使の第一の者から第三天使に至るまでの天使の線は、一つの全体として考慮されなければならない。これ

によって、十一人の天使の線が特定される。

黙示録第十四章の三天使は、裁きの開始を告げたミラー派の警告の使命を表しており、続いて、裁きの終結を告げている十四万四千人の警告の使命を表している。

七つのラッパは、太陽礼拝を強制した諸国民の上に裁きをもたらすために、神が摂理的に用いられた諸力を表している。

最初の四つのラッパは、西ローマが西暦427年までに段階的に滅亡していったことを示している。

第五および第六は、1449年から1453年に至るまでの東ローマの滅亡を示している。

最後の三つのラッパは、三つの災いにおけるイスラムを表している。

黙示録第十章における御使いはキリストであり、初めにおいてその運動に力を与えるために降って来られ、また黙示録第十八章において再び降って来られるのは、終わりににおいてその運動に力を与えるためである。

第七のラッパは、贖罪の日の実体であるさばきの開始にあたる1844年10月22日に鳴り始めた。ヨベルのラッパは贖罪の日に吹き鳴らされるべきものであった。したがって、さばきにおいては二つのラッパ、すなわちヨベルのラッパと第七のラッパとが鳴り響くのである。

それゆえ、あなたは第七の月の十日にヨベルのラッパを鳴り響かせなければならない。贖罪の日に、あなたがたはそのラッパを国中いたるところに鳴り響かせなければならない。あなたがたは第五十年を聖別し、その地のすべての住民に対して全土に自由を布告しなければならない。それはあなたがたにとってヨベルの年である。あなたがたは各々その所有地に帰り、各々その家族のもとに帰らなければならない。その第五十年は、あなたがたにとってヨベルの年である。あなたがたは種を蒔いてはならず、ひとりでに生えたものを刈り取ってはならず、手入れされていないぶどうの木やぶどうを集めてはならない。レビ記 25:9-11。

レビ記のまさに次の章に置かれている、イスラエルが「七つの時」の間散らされることを特定する文脈は、贖罪の日にヨベルのラッパを吹き鳴らすよう命じる教えへと導く節々の中に示されている。

イスラエルの子らに告げて言いなさい。あなたがたがわたしの与える地に入るとき、その地は主のために安息を守らなければならない。六年の間、あなたは畑に種をまき、六年の間、ぶどう畑の枝を刈り込み、その実を取り入れなければならない。しかし第七年には、その地に全き休みの安息、主のための安息がなければならない。あなたは畑に種をまいてはならず、ぶどう畑の枝を刈り込んではいけません。あなたの収穫のうち、ひとりでに生えたものを刈り取ってはならず、手入れしていないぶどうの実を取り集めてはなりません。それはその地の休みの年だからである。その地の安息による産物は、あなたがたの食物とならなければならない。あなたのため、あなたの男奴隷のため、あなたの女奴隷のため、あなたの雇い人のため、あなたとともに寄留する在留異国人のため、またあなたの家畜のため、あなたの地にいる獣のために、そのすべて

の産物は食物とならなければならない。あなたはまた、自分のために七度の安息年、すなわち七年を七たび数えなければならない。こうして七度の安息年の期間は、あなたにとって四十九年となる。レビ記 25:2-8。

ミラーは、第二十六章においてイスラエルが土地の安息を守らなかったことに対するさばきを認識したとき、一日が一年を表すという原則を適用し、一年が三百六十日であること、そして三百六十の七倍が契約を破ったことに対する二千五百年の刑罰に当たることを見いだした。これは彼が最初に発見した預言的真理であった。それは、キリストがミラーの働きを通して据えられた土台を構成する諸真理の基礎である。ヨベルのラッパは、解放と自由の告知である。

第七のラッパは、第三の災いであるイスラムである。

しかし、第七の御使いが声を発し、ラッパを吹き鳴らし始めるその日々には、神の奥義は成就されるのである。神がそのしもべたち、すなわち預言者たちに宣言されたとおりである。黙示録 10:7

イスラムの第七のラッパは外的な預言的真理であり、ヨベルのラッパは信仰による義認、すなわち罪からの救いという内的な預言的真理であって、シスター・ホワイトによれば、それは真理における第三天使である。第七のラッパが鳴り響いている期間に、「あなたがたのうちにはいますキリスト、栄光の望み」という奥義は、キリストがその神性を十四万四千人の人性と結び合わせるとき、完成される。そのとき神の印を受ける者たちは、第三の災いとして表され、また第三天使の警告でもある、警告のラッパのメッセージを宣べ伝えるであろう。第三の災いは、イエス・キリストにほかならない御方である天使が、その手にメッセージを携えて降って来られるとき、第三天使のメッセージに力を与える。

第一の禍いおよび第二の禍いの時の預言が第一天使の使命に力を与え、また第三の禍いの預言が第三天使の使命に力を与えるものであったことを私たちが確認するとき、私たちはラッパを、「日曜日遵守の強制に応じてローマにもたらされた裁き」であると認めているのである。それらの摂理的な裁き、とりわけ最後の三つの禍いのラッパは、黙示録十四章の三天使の警告の使命と一致し、かつそれに並行している。ミラー派の歴史においては二つの禍いと二人の天使とが対応し、十四万四千人の歴史においては第三の禍いと第三の天使とが対応する。第一天使および第二天使の初期の歴史においては、裁きの開始を告げる使命は、第一および第二の禍いにおけるイスラムの成就によってカづけられた。第三天使の終末の歴史においては、裁きの終了を告げる使命は、第三の禍いにおけるイスラムの成就によってカづけられた。

初めと終わりにおける力の付与は、黙示録第十章および第十八章の御使いによって表象されていたが、その御使いは「イエス・キリストにほかならないお方」であった。イスラムの外的メッセージと裁きの内的メッセージとは、外的には第三の災いのラッパであり、裁きの内的メッセージは第三の天使のラッパである。イスラムの外的ラッパは二千五百年の預言であり、第三の天使の内的ラッパは二千三百年である。両者は死者の裁きの開始において到来して鳴り響き、また両者は生者の裁きの開始において再び到来した。

黙示録十章の天使は、イスラムに関する預言の成就として1840年8月11日に降りて来たのであり、そうすることによって、その天使は、イスラムに関する一つの預言の成就を伴う黙示録十八章の天使の降下を予表した。321年の安息日法の反逆に対する神の裁き、そして次いで538年におけるその裁きは、最初の六つのラッパによって表されており、間もなく到来する安息日法の反逆に対する神の裁きは、第七のラッパ、すなわち第三の災いであり、また第三天使でもあるものによって表されている。1844年10月22日における裁きの開始の警告の使命と、9/11における生ける者の裁きの警告の使命とは、いずれも、ジョーンズが提示した順序における第七の天使によって力を与えられた。八章と九章には六人のラッパの天使たちがおり、次いで十章において、イエス・キリストにほかならない位格者である天使が降下する。彼は天使たちの系列における第七であり、その後十一章において第三の災いが続くが、それは1844年に鳴り始めた第七のラッパであると同時に、黙示録十四章の第九、第十、第十一の天使へと至る天使たちの系列においては第八でもある。

第三天使の使命は、第一および第二の天使の使命から切り離して考えることはできない。しかし同様に、それはまた、背教に対する神の裁きの七つのラッパから切り離すこともできない。黙示録第八章における最初の四つの裁きのラッパは、コンスタンティヌスが西暦321年に最初の日曜日法を制定した後の西ローマの漸進的な滅亡を示しており、その開始は彼が330年に帝国を東西に分割した時にあった。

「わが国が、その立法議会において、人々の宗教上の特権に関してその良心を拘束する法律を制定し、日曜日遵守を強制し、第七日安息日を守る者たちに対して圧制的権力を行使するなら、そのとき神の律法は、あらゆる実際的意味において、わが国において無効とされるのであり、そして国家的背教の後には国家的破滅が続くであろう。」
J Review and Herald, December 18, 1888.

国家的背教が国家的破滅をもたらすという原則は、西ローマを476年までに終結へと導いた最初の四つのラッパによって、コンスタンティヌスの国家にも及んだ。東ローマは1453年にその終焉を迎えたが、預言的には1449年7月27日にすでにその国家主権を失っていた。バビロンが一夜にして覆されたのとは異なり、ローマは、西方も東方も、その終わりへと漸進的に導かれたのである。476年までの最初の四つのラッパの下における西ローマの没落は、四つのラッパの下におけるアメリカ合衆国の没落を表しており、それは一つのレベルでは、1798年に始まり日曜法で終わるアメリカ合衆国の四世代を表している。これらの四世代は、アドベンチズムの四世代と並行しており、それはまた『黙示録』第2章の最初の四つの教会、ならびに『エゼキエル書』第8章における四つの増大する忌むべきこと、および『ヨエル書』における四つのいなごの波とも並行している。

まことに主なる神はこう言われる。わたしがエルサレムに、わたしの四つの激しいさばき、すなわち剣と飢饉と害をなす獣と疫病とを送り、人と獣とをそこから断ち滅ぼすときには、なおさらではないか。エゼキエル 14:21。

第五および第六のラッパは東ローマを打ち倒した。そして、預言的關係において西ローマに対する東ローマは国家を表している。西ローマは教会を表す。また西ローマはアメリカ合衆国をも表しており、それは西ローマがそうであったように、最初に征服される。

「宗教的自由の地であるアメリカが、良心を強制し、人々に偽りの安息日を尊ばせることにおいて教皇制と結合するとき、全世界のあらゆる国の民は、その模範にならって従うよう導かれるであろう。」『テスティモニーズ』第6巻、18頁。

最初の四つのラッパはアメリカ史の四世代を表しており、合衆国が倒れるとき、ダニエル書十一章四十一節の栄えある地が、まさに倒れたところであり、次なる障害はエジプト、すなわち世界の他の諸国民の象徴である。次いで、十人の王である国際連合は、黙示録十七章にある「しばらくの間——時」のために、自らの第七の王国を教皇制に与えることに同意する。これは、ヘロデが自分の王国の半分を与えると誓う、その誕生日の祝宴において起こる。ヘロデの誕生日の祝宴において、その時に、壁のしっくいの上に手書きの文字が現れ、ベルシャザルは殺される。その時は日曜法において到来し、人類の恩恵期間の終結まで続く。第七の王国は、1453年に崩れ落ちたコンスタンティノーブルの城壁の破壊によって予表されたとおりに征服される。1449年によって予表された、合衆国における日曜法から、1453年のコンスタンティノーブル陥落に至るまでは、象徴的に四年である。教皇制は1798年にその致命的な傷を受けた。

ダニエル書十一章四十節において、教皇制は終わりの時である1798年に倒れた。次いで、南の王は終わりの時である1989年に倒れた。合衆国は四十一節において倒れ、エジプトは四十二節において倒れ、そして教皇制は四十五節において、その第二の、そして最終的な倒れに至る。

「ダニエル書および黙示録に明らかに示されている諸国の興亡から、私たちは、単なる外面的・世俗的栄華がいかに空しいものであるかを学ばなければならない。バビロンは、そのあらゆる権勢と壮麗さをもって、しかもその比類なき権勢と壮麗さは、それ以後この世界がついぞ見たことのないものであり、また当時の人々にはきわめて確固として永続するもののように思われたのであるが、——それがいかに完全に過ぎ去ってしまったことであろうか。『草の花』のように、それは滅びたのである。ヤコブ1:10。メド・ペルシヤ帝国も、またギリシヤとローマの諸王国も、同じように滅び去った。そして、神をその土台としないすべてのものも、そのように滅び去る。ただ、神の御目的と結びつき、神の御性質を表すものだけが永続しうる。神の原則だけが、この世界の知る唯一の不動のものである。」『国と指導者』548頁。

四十一節におけるアメリカ合衆国（偽預言者）の没落は一四四九年によって予表され、四十二節におけるエジプト（竜）の没落は一四五三年によって予表され、また教皇制（獣）は、一七九八年によって予表されたとおり、助ける者なくしてその終わりに至る。偽預言者と竜はラッパの勢力によって打ち倒され、獣は竜の勢力によって打ち倒される。

数字の四は、一つの王国の解体を象徴する。アレクサンドロスの王国は四つの王国へと分裂し、エジプトは第四代において紅海で滅び、またイスラエルはエゼキエル書八章の第四の忌むべきことにおいて太陽を拝している。地の獣におけるプロテスタンティズムと共和主義の四世代は一七九八年に始まり、両方の角にとって、ほどなく到来する日曜法によって終わる。エゼキエルによるエルサレムへの四つの激しいさばきは、アメリカ合衆国への四つのさばきを例証しており、また聖書預言の第六の王国に対するそれら四つのさばきは、聖書預言の第七の王国が、ツロの淫婦の支配する教会と国家の関係において、自らの王国の半分を教皇制に与えることに同意する一四四九年から一四五三年までの四

年間を予表している。

1449年から1453年までの四年間は、日曜法における第七の王国の滅亡を表しており、また同時に、日曜法から恩恵期間の終了に至るまでの第八の王国の滅亡の期間をも表している。世であり、また教皇制に与えられる竜でもあるエジプトの征服は、1449年から1453年までの四年間によって象徴される期間の初めにおけるフラクタルである。これは、コンスタンティノーブルの陥落を、日曜法の時に、そしてさらに再びミカエルが立ち上がる時に、指し示している。ミカエルが立ち上がる時、靈感によれば、四人の天使は完全に解き放たれる。

「わたしは、イエスの聖所における働きが終わるまで、四人の御使いが四方の風を引き止めているのを見た。そしてその後、七つの最後の災いが来るのである。」『初代文集』36頁。

アレクサンドロスの王国の四つの分裂、西ローマに下る四つのラッパ、東ローマに解き放たれる四方の風、エルサレムに下る四つの厳しい裁き、そして教皇制が助ける者なくその終わりに至る時に解き放たれる四方の風。これらの預言的象徴が提示されたところで、われわれは、まもなく到来する日曜法にこれを適用するという文脈において、第二の災いを考察する。

フィレンツェ公会議

1439年、フィレンツェ公会議（フィレンツェ合同会議とも呼ばれる）において、東方正教会の代表者たち（ビザンツ皇帝ヨハネス8世パレオロゴスおよびコンスタンティノーブル総主教に率いられていた）は、ローマ・カトリック教会との正式な合同教令に署名した。彼らは、ローマ教皇を全教会の頭（最高権威）として認めることに同意した。

なぜなら、夫は妻のかしらであり、それは、キリストが教会のかしらであられるのと同様であって、キリストはそのからだの救い主であられるからです。エペソ 5:23。

ニカイア信条

皇帝と総主教は、ニカイア信条への付加である「フィリオクエ条項」を受け入れた。これは、聖霊が父と子から発出する、と主張するものである。ニカイア信条は、カトリック信仰の歴史において最も重要で、かつ最も広く用いられてきた信仰表明の一つである。ニカイア信条は、カトリックの中核的信条を公式に要約したものである。それはもともと、イエス・キリストがいかなるお方であるかについての真理を擁護するために作成された。325年、アリウスという名の司祭が、イエスは父なる神によって創造されたのであり、完全な神ではないと教えたため、大きな論争が生じた。

コンスタンティヌス皇帝は、この問題を決着させるために第一ニカイア公会議を召集した。公会議は、イエスが父と「同一本質」である、すなわち完全に神であることを強く確認した。この信条は、後に381年のコンスタンティノーブル公会議において拡充された。この点で注目すべきことは、ニカイア信条が最初のコンスタンティヌスの歴史において確立され、そしてそれが最後のコンスタンティヌス、すなわち東方ビザンティン帝国最後の皇帝であった第十一代コンスタンティヌスにとっても一つの問題となる、ということ

である。最初の者である大コンスタンティヌスは、聖書預言において繰り返し主題として提示されている。彼は東方帝国の初めにおける支配者であり、それゆえ東方帝国の終わりにおける支配者を予表している。ニカイア信条が始まりと終わりの双方の歴史における一要素であるという事実は、アルファとオメガの原則を理解するならば、預言の学徒によって留意されなければならない。

381年、ニカイア信条は、煉獄の教理、聖餐の教理、ならびにラテンの慣行であった聖餐における種なしパンの使用の受容をもって改訂された。381年の信条はまた、原罪および死後の世界に関するカトリックの理解を受け入れた。それは次の重要な一文をもって締めくくられた。「われわれはまた、聖なる使徒座およびローマ教皇が全世界に対する首位権を有し、キリストの真の代理者であることを定義する。」

フィレンツェ公会議において、さらに改訂された別の版が1439年7月6日に署名されたが、それは1453年にコンスタンティノーブルがオスマン・トルコに陥落する14年前のことであった。この合同は、強い政治的圧力の下で署名されたものであった。ビザンツ帝国は、進撃するオスマン勢力に対抗するため、西方からの軍事的援助を切実に必要としていた。ギリシア側の代表者たちが帰国すると、この協定は東方における聖職者、修道士、および一般民衆の大多数によって強く拒絶された。これに署名した司教たちの多くも、後にその支持を撤回した。この合同はついに全面的に実施されることはなく、その後の数年間のうちに東方正教会によって正式に否認された。1453年にコンスタンティノーブルが陥落する時までには、この合同はすでに事実上崩壊していた。歴史家たちはしばしばこれを、神学的、文化的、ならびに民衆的な深い抵抗のゆえに失敗した政治的合同であったと描写している。

325年の第一ニカイア公会議において、ニカイア信条が採択された。これは、「時」として表されるダニエル書第十一章二十四節の三百六十年が終結した330年の五年前に当たる。

彼は安らかに州の最も肥えた地にまで入り、その父祖たちも、その父祖の父たちも行なわなかったことを行なう。すなわち、彼は分捕り物と略奪物と富とを彼らの間に散らし、さらに時のある間、要害に対してその策略を巡らすであろう。ダニエル 11:24。

紀元前31年と330年はいずれも、ダニエル書11章27節および29節の「定められた時」を画する年である。

この両王の心は悪事を行うことに向けられ、彼らは同じ食卓に着いて偽りを語る。しかし、それは成功しない。終わりはなお定められた時に至るからである。……定められた時に、彼は再び来て南に向かう。しかし、そのことは前の時のようでもなく、後の時のようでもない。ダニエル11:27, 29。

東ローマの預言的系統の始まり（330年）と終わり（1449-1453年）は、最初と最後の皇帝コンスタンティヌスによって表象されている。ビザンツ帝国と呼ばれる東ローマの預言的系統のアルファとオメガは、紀元前31年のアクティウムの戦いから330年に至るまで最高支配を行った三百六十年の帝政ローマの終焉と結びついており、そこからさらに1453年へと至る。紀元前31年のアクティウムの戦いの前、マルクス・アントニウスとアウグス

トウス・カエサルは、一つの食卓において、成就しない偽りを語った。330年以前、325年にはニカイア信条が採択された。1453年以前には、まさにその同じニカイア信条の改訂版が採択された。紀元前31年以前には、二人の政治的人物が一つの食卓において偽りを語った。325年には、霊的な偽りが一つの食卓において語られた。その二人の証人は、1439年のフィレンツェ公会議において採択された政治的および霊的偽りを特定している。その改訂されたニカイア信条は、合同教令と呼ばれた。

一つの食卓における偽りの最初の道標は紀元前31年に先立って現れ、それは異教ローマの二つの政治的派閥の間にあった。それらの偽りのための定められた時は紀元前31年であり、それは、エジプトを表す一人の男と一人の女の同盟に対するローマの象徴としてのアウグストゥスから成っていた。第二の一連の偽りは325年であり、定められた時は330年であった。第三の一連の偽りは1439年にあり、定められた時は1449年—1453年であった。1439年に食卓に着いていた者たちは西ローマと東ローマを表しており、東ローマは、宗教上の論議に同意することによって、政治的目的を追求していた。紀元前31年、続いて330年、そして1453年は、ローマの線の三重の適用を表している。

マルク・アントニウスとクレオパトラの同盟による政治的脅威は、325年におけるアリウス派異端の霊的脅威を予表し、さらにそれは、1439年におけるイスラム教徒トルコ人の政治的かつ宗教的脅威を予表した。

ニカイア信条の教義は偽りであり、そのうちには何の真理もない。1439年7月6日にフィレンツェ公会議において署名された文書は「合同教令」と呼ばれ、同じ偽り、しかもそれ以上のものを示していた。1439年に代表者たちがコンスタンティノーブルへ帰還したとき、彼らは怒りと裏切りの非難をもって迎えられた。こうした言い回しが広まっていた——「教皇の司教冠よりは、トルコ人のターバンのほうがましだ。」

この合同は、主として、ビザンツ皇帝がオスマン朝に対抗するために西方からの軍事的援助を切実に必要としていたために締結された。ところが、軍事援助がほとんど、あるいは全く到来しないことが明らかになると、この合同への支持はたちまち消え失せた。1450年から1451年にかけて、いくつかの東方のシノドスはこの合同を退け、1453年にコンスタンティノーブルが陥落したのち、この合同は完全に放棄された。フィレンツェ合同教令の最終的帰結は、東方正教会において、失敗し退けられた公会議と見なされている。それは有効なものとして承認されていない。しかしながら、ローマ・カトリック教会は、なおこれを有効な公会議であると見なしている。

私たちは、第二の災いの預言的特質が第三の災いの歴史においてどのように反復されるかを理解するための論理を確立している。第一の災いの百五十年の預言は、1299年7月27日に始まり、1449年7月27日に終わった。

1449

コンスタンティノス11世パレオロゴスは1404年に生まれ、1449年1月から1453年5月29日まで在位した。彼は、1,100年以上存続した東ローマ（ビザンツ）帝国の最後の皇帝であった。1453年のオスマン帝国による包囲の際、メフメト2世の8万を超える軍勢に対し、わずかに約7,000人から8,000人の守備兵とともに、彼は勇敢にコンスタンティノーブル防衛

を指揮した。1453年5月29日、ついにコンスタンティノープルが陥落したとき、彼は城壁の上で戦いながら死んだ。彼の遺体はついに確定的には確認されなかった。彼の死は、ローマ帝国（紀元前27年にアウグストゥスによって創設された帝国の最後の直接的継承体）の終焉を画した。

彼はギリシアの歴史と正教会の伝承において英雄的存在として記憶されており、伝説の中ではしばしば「大理石の皇帝」と呼ばれている——すなわち、いつの日か彼が再来してコンスタンティノープルを救うであろうという信仰である。

ヨハネス八世パレオロゴス（1392-1448）は、1425年から1448年にかけて統治した、ビザンツ帝国最後から二番目の皇帝であった。彼は皇帝マヌエル二世パレオロゴスの長男であり、コンスタンティノス十一世の兄であった。ヨハネス八世は、その治世の大半を、死につつあるビザンツ帝国をオスマン帝国から救おうと必死に努めて過ごした。1439年、彼は自らイタリアへ赴き、フィレンツェ公会議を主宰し、そこで彼と東方正教会の使節団は、一時的にローマ・カトリック教会との再統合に同意し、教会の長として教皇を受け入れた。コンスタンティヌス大帝もまた、ニカイア公会議を主宰していた。ヨハネス八世は、この教皇庁との合同がトルコ人に対抗するための西方からの軍事的援助をもたらすことを期待したが、その合同はコンスタンティノープルではきわめて不評であり、最終的には失敗に終わった。ヨハネス八世は1448年に（自然死で）世を去ったが、それは1453年にコンスタンティノープルが陥落するわずか五年前のことであった。その後、弟のコンスタンティノス十一世が皇帝となり、都を守って戦い、そこで死んだ。

ヨハネス八世が1448年に死去すると、その後継者として弟のコンスタンティノス十一世が選ばれた。1448年までに、ビザンツ帝国はごく小さな属国と化しており、オスマン帝国はコンスタンティノープルの王座に誰が就くかについて強い影響力を有していた。1449年7月27日、ビザンツ帝国の末期において、きわめて重大な政治的出来事が生じた。ビザンツ皇帝ヨハネス八世パレオロゴスは、これに先立つ1448年に死去していた。彼の弟コンスタンティノス十一世パレオロゴス（最後の皇帝）が、コンスタンティノープルにおいて皇帝として宣布された。しかし、コンスタンティノス十一世は正式に即位する前に、オスマン帝国のスルタン（ムラト二世）のもとに使節を送り、統治することの許可を求めた。スルタンはその許可を与え、そしてその後になって初めて、コンスタンティノス十一世は正式に戴冠され、皇帝として承認された。この行為は、ビザンツの独立を自発的に放棄したものと見なされた。ビザンツ皇帝が、自らはオスマン・トルコ人の許可によってのみ統治していることを公然と認めたのは、これが初めてであった。そのわずか4年後の1453年、コンスタンティノープルはオスマン帝国の手に落ちた。

1449年7月27日から三百九十一年と十五日後、すなわち1840年8月11日に、トルコは四大ヨーロッパ列強に服してエジプトからの保護を求め、こうして一時、一天、一月、一年の預言を成就した。私たちは今や、間もなく到来する日曜法において第一の災いと第二の災いを適用するための論理を整えた。百四十四千人の象徴としてのペテロは第三天使の運動を表し、ウィリアム・ミラーは第一天使および第二天使の運動を表している。両方の運動は「鍵」と結び付けられている。

また、わたしはダビデの家の鍵を彼の肩に置く。彼が開けば、閉じる者はなく、彼が閉じれば、開く者はない。イザヤ書 22:22。

また、あなたに言う。あなたはペテロである。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の門もこれに打ち勝つことはできない。わたしはあなたに天の御国の鍵を与える。あなたが地上でつなぐことは、天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは、天においても解かれる。マタイ 16:18, 19。

次の記事では、わたしたちはニネベの戦いに取り組む。それは、底知れぬ穴を開く「鍵」であるだけでなく、ダニエル書十一章の証言全体を完全な秩序へと整える預言的な鍵でもある。ミラーの夢において小箱に付いていた「鍵」は、ミラーの聖書研究の方法であった。ミラー派の歴史における証拠聖句の提示と、第三天使の歴史における「ここに少し、そこに少し」とを結び合わせることが、黙示録九章の鍵が四十節の外的メッセージの隠された歴史を解き明かし、それを秩序立てて整えることを可能にする鍵である。

次の記事において、私たちは引き続き考察を続ける。

「預言者にとって、輪の中の輪、それらと結び付いている生き物たちの現れは、ことごとく入り組んでいて説明しがたいもののように見えた。しかし、無限の知恵の御手はその諸々の輪の間に見られ、その働きの結果として完全な秩序が現れる。すべての輪は、他のすべての輪と完全に調和して働いている。」『教役者への証言』214頁。